

世界とつながる
教室

房総半島で芽生えた
世界へのまなざし

connect with
El Salvador
エルサルバドル



千葉県の館山市立神戸小学校で、子どもたちがある展示会を開催した。紹介されているのは、日本からはるか遠い中米の国、エルサルバドル。そこで子どもたちが伝えたかったことは――。

初めて知った
開発途上国の現実

「これが現地のスーパードです。コーヒーが有名なので、大人になったら飲んでみてください」
下級生たちを前に、女の子が一生懸命に発表している。視線の先には、「ここがエルサルバドルだ」というメッセージが添えられた地図とたくさんさんの写真が飾られている。その隣では、けん玉で楽しそうに遊ぶ子どもたちに、「エルサルバドルのけん玉は、日本のものよりも先が尖がっているんだよ」と男の子が声を掛けている。



現地のおもちゃや楽器を紹介するコーナーも



エルサルバドルの文化を紹介する4年生の女の子。展示物も全て自分たちで作った



エルサルバドルの位置を説明する下村先生



教師海外研修で小学校を訪ねた下村先生(左)。「あっち向いてホイ」を教えて交流した

「伝えたい」思いが
原動力に

「みんな来てくれるかな」。受付担当の瀧口将希くんは、昼休みが始まる前からそわそわしていた。しかし、そんな心配をよそに、教室はすぐにいっぱいになった。パネル展示、DVDの上映、本の読み聞かせ。全て自分たちで企画したものだ。
しばらくすると、劇も始まった。8人の児童がエルサルバドルで暮らす人々を演じる。台本から自分たちで考え、休み時間や放課後に練習を重ねてきた。上演は1日2回。初回の上演が終わると、その様子を静かに見つめていた下村先生が8人に声を掛けた。「伝えたいという気持ちを感じられなかった」。厳しい言葉

だが、これこそが下村先生が考えるもう一つの狙いだ。「表現する面白さを知ること、主体的な子になってもらいたいのです」。
そして迎えた2回目の上演。声の大きさや表情は明らかに違っている。劇の中心盤、市民が強盗に襲われるシーンで「バン」とピストルの音が響くと、見ている児童たちに緊張が走った。「貧しさから抜け出せなければ、若者がこうして犯罪を起こしてしまいます。この劇を見てくれたみんなも協力してください」。最後のメッセージが流れると、会場は拍手に包まれた。
劇を見終わると、1年生の黒川宗照くんが、「貧しい国ではご飯が食べられないことを初めて知った」と話してくれた。劇のリーダーを務めた安田碧海ちゃんも、「みんな真剣に見てくれてうれしかった。英語を勉強して、もっと世界のことを知りたい」と自信を深めたようだ。



家での乳搾りの手伝いが忙しくて学校に通えない子どもがいることを劇で伝えた

ここは房総半島の最南端に位置する、館山市立神戸小学校。3月上旬のある日、多目的教室は、昼休みになるやいなや、異国の空間へと様変わりした。中米の国、エルサルバドルの歴史や文化、そして現地の人々の暮らし、貧しさは何か。24人の4年生が、これまで授業で学んできたことを3日間にわたり発表していく。
教室の奥に進むと、一人の男性が地球儀を指さしながら、「先生はこの国に行ってきたんだよ」と児童に話し掛けている。4年生の担任で、この展示会の「仕掛け人」でもある下村圭先生だ。

下村先生は昨年8月、JICAの教師海外研修に参加して、約10日間エルサルバドルに滞在した。JICAボランティアの活動に触れ、開発途上国が抱える問題を目の当たりにする中で、人と人とのつながりの大切さを肌で感じたという。下村先生が研修に参加した理由。それは、自分の経験を通じて日本の子どものための目を世界に向けさせられたら、という思



昨年12月に行われた授業では、貧しい国のために何ができるかを1人1人が発表した

受身だった子どもたちが、いつしか自ら考え、行動する大切さを学んでいた。下村先生は「目の前の出来事以外にも考えを巡らせ、小さなことから何かを感じ取って社会に還元できる子が増えてほしいと思います」と期待を込める。子どもたちの「伝えたい」という思いから生まれた展示会。世界に対する関心の輪が、そこからさらに広がっている。